

授業科目でPBLを導入する教員へ教材開発費・授業開発費を支援する「PBL教育支援プログラム」に、本年度は11件が採択されました。本号から、採択課題の成果報告をシリーズにて掲載します。第1回は教育学部、岡野昇先生の「体育教材研究」におけるPBL教育の実践報告です。

2012年度開講「PBL教育支援プログラム」成果報告(1)

ゆらぎを与える問題の提起

1. 「問題(Problem)」が問題となっているか

平成20年度からPBL教育支援プログラムに取り組み続けて気づいたことがある。Problem-based LearningとProject-based Learningの2つの形態をもつPBL教育が、最も大切にしなければならないことは、6つの特性(現実的問題から出発、問題解決を指向、学習過程を学生が主導、グループ活動の活用、学習資源・機会の確保、プロセス評価の重視)を満たすことでなければ、3つの基礎要件(問題基盤性、学習自己決定性、形成的評価)を満たすことでもないということである。ましてや先に開催された全学FD(2012年9月11日)で提示された「PBLの効果を上げるための工夫(思考の変化に導く工夫、現実性を高める工夫、評価や振り返りの工夫)」を行うことでない。それは教員が15回の授業を通してこだわりぬきたい「問題(Problem)」の提起が行われているかということであり、「問題(Problem)」が問題となっているかということである。全学で増え続けるPBL授業の質的向上を目指すのであれば、教育方法レベルの普及や議論に終始することから脱し、PBL教育の根幹をなす「問題(Problem)」とは何かという視点からの協議が必要となってきたように感じられる。

このような問題意識のもと、本稿では2010年度前期教育学部で開講された専門教育科目(小学校の教科(体育)の指導法)の「小学校専門体育Ⅰ」の事例報告を行う。本授業は、3つの対話的实践(テーマ・他者・自己との対話)を通して、「いつの間にかそういうものか」と思い込んでいる思考の枠組み(常識)を問い直しながら、新しい小学校体育のあり方を構築することを目指している。すなわち、小学校の体育の指導法を学ぶ授業であるから、従来からある指導法をそのまま身につけよ

うとするのではなく、その指導法の背景にある運動の認識の仕方に焦点を当てながら毎回のテーマ(問題)を提起し、取り上げようとする運動の真正な学びの内容について探究していくことに力点を置くことである。なお、授業の展開は『News Letter 第22号』を、シラバスはウェブシラバスを参照されたい。

2. 第4回目の授業から～運動の中心的なおもしろさ①(器械運動系/跳び箱運動)～

開脚跳び越し(跳び箱運動)の授業で、「跳び箱の前の方に手を着いて跳びましょう」と教わったことはないだろうか。恐らくこの指導法は「跳び箱にお尻を着かずに跳ぶことができる」ということを意図したものと思われるが、これは『小学校学習指導要領解説体育編(平成20年8月、文部科学省)』(以下、「解説」とは大きく異なる考え方である。「解説」の「ウ 跳び箱運動(第5学年及び第6学年の目標及び内容)」によれば、「基本的な支持跳び越し技(切り返し系、回転系)に取り組み、それぞれの系について自己の能力に適した技が安定してできるようにするとともに、その発展技をできるようにする」と記述されている。これは、開脚跳び越しとは「跳び箱にお尻が触れることなく着地する技」ではなく、「切り返し系の支持跳び越し技」として位置づいているということである。

とはいっても、「切り返し系の支持跳び越し技」とはどういうものか分かりにくいので、本時では「2人並んだ馬の手前の馬に着手をしてもピタッと着地を決めることができるかな」という運動課題を提示した。すると着手を奥の馬で行うと跳んでいた学生たちが、写真1のように手前の馬で着手を行ったとたんに体勢を大きくくずす学生が続出した。実は、このことが「切り返し系の支持跳び越し技」になっていないことを物語っている。



写真1



写真2

跳び箱運動は、助走から踏み切り着手するまでの局面と着手から着地までの局面の二つに大別される。「切り返し系の支持跳び越し技」とは、前半の局面で前傾姿勢になっている体勢(前転運動)を、着手(突き放し)によって後傾姿勢の体勢(後転運動)に切り返すことによって、着手後の空中局面において滞空時間がうまれフワッとした感覚が味わえると同時に、安定した着地が得られるという技である(写真2)。つまり、跳び箱運動では跳び越したという結果ではなく、後半の空中局面の雄大さという過程に、跳び箱運動ならではの文化的な価値(おもしろさ)があり、そのおもしろさを楽しむための身体技法として、切り返し系や回転系の支持跳び越し技が今日まで傳承されている。そのため教える側は、子どもたちにこのおもしろさを感じられるような状況づくり(課題設定)や働きかけが大切になってくる。

その一方で、「手を前の方に着き、跳び箱にお尻が触れることなく着地する技」は、跳び箱を障害物とみなし克服しようとすることによって、着手は体を前方に運ぶための体重移動の役割として機能することになり、その運動は正確には「跳び越し」ではなく「またぎ越し」を行っていることになる。この点において、跳び箱運動とは似て非なる運動を行わせていることになり、文化的な価値を楽しむための身体技法を学校の体育授業によって途絶えさせてしまっているということになってしまう。

* 次号は教育学部 松浦 均先生の成果報告を掲載します。

3. 既知から未知へ

下記は、学生が毎回授業後にテーマに沿った振り返りを行う「学びの履歴カード」に記述されたものの抜粋である。そこからは、自分自身が受けてきた過去の体育授業とつなぎ、実際に取り組んだ運動中の自らの身体とつなぎながら考察し、自分自身が教師としてどのような姿勢で臨むかということが描き出されている。

■跳び箱といえば、自分はいつも跳び越せるか越せないかという結果ばかりに着目して跳んでいたように思う。このような結果重視の体育では、跳べない子を体育嫌いにしかねない。今回の活動では、着地の位置を決め、びたっと止まるために、手を着く位置を手前にしたり、姿勢を前傾から手を着いた後、体を起こすといったように、過程(運動している間)を様々に工夫した。特に2人並んだ馬を跳ぶときは、はじめ前転から後転に回転を切りかえずに跳んでしまって、前に頭の方からつまこんでいくので着地がこわかったが、その切り返しを意識したら少しではあったが、体がフワッと上に浮く感覚をはじめて味わうことができたし、びたっと止まれてこわさなど感じず、むしろその体が浮き上がる感覚が心地よかった。結果も一つのおもしろさではあると思うが、運動の過程に中心のおもしろさはあると実感した。私たちが中心のおもしろさを理解し、子どもたちにいかにその魅力を伝えられるかが、子どもたちを夢中にさせる鍵となると感じた。

■跳び箱の中心のおもしろさとは、高い段を跳び越えることではなく、前転からの後転への切り返しで起こるフワッと感を味わうことにある。この感覚を体験することなく、跳び箱を越えることに必死になり、越えられない→できない→嫌いになるにつながるのではないだろうか。そして中心のおもしろさを子どもたちに体験させるには私自身が正確に認識できてないと教えることは無理であると再認識した。今までの概念を疑い、教材研究をしっかりと行うことが求められる。(中略)子どもの能力のせいにしてはならないと深く認識した。

勉強とは未知から既知へと進むが、学びは既知から未知への旅である。既知にゆらぎを与えてくれるような問題に出会えたとき、初めて学び手は主体的にその問題の世界へと参入していくのだと今回の取り組みで再認識した。この他にも「手をしっかりマットについておへそを見るように小さく転がしましょうは本当か?」「打つことができないとベースボール型ゲームは始まらないは本当か?」「恥ずかしがってばかりいないでちゃんと踊りましょうは本当か?」「リレーで大事なことはバトンをつなぐことか?」などという問題を提起した。

学び手である学生にとって、学びがいのある問題を用意するのは教員である私の仕事であり、教員自身が最大限に主体性を発揮すべき部分であると考えている。それを欠いたPBL教育は、Poor-based Learningへと陥り、学びの空洞化をもたらすように感じる。

(岡野 昇)